〔巻頭言〕

臨床家としての原点

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科　斉　藤　美　香

本誌も第20号という記念すべき節目にあたる。これまで，心理臨床センターの活動に関ってくださった全ての方にこの場をお借りして，御礼と感謝を申し上げたい。2022年度には本センターも新札幌キャンパスに移転する予定であり，２年後という新たな節目に向かって，現在準備中である。

私たちが心理援助職をめざした動機は人それぞれであろう。しっかりと言語化できる面と無意識の選択や縁によって導かれた面もあるだろう。私事になるが，幼い頃から，多くの対人援助職の方と接する必要があった。子ども心に「適当にあしらっている」「この人はごまかしていない」などと生意気にも嗅ぎ分けてきた。信頼でき，力になってくださった方は，我が身のことのように当事者性をもちつつ一緒に考えてくれ，豊富な臨床経験に基づく専門性に裏付けられた助言をしてくれただけではなく，人として尊敬できる方だった。このような経験が影響したのか「自分や家族が相談したいと思える臨床家をめざす」というのが私の臨床家としての原点だったと思う。(そうなっているかは甚だ疑問であるが)

相談したいと思える相手は，人によってさまざまであろう。またも私事になるが，40年来お世話になっているかかりつけ医はいわゆる町のお医者さんである。付き合いが長い分，家族構成，生育歴や生活状況など症状だけではなく，その背景の生活までを理解した上で総合的に診断と治療をしてくださる。例えば「喉が痛い」とありがちな症状を訴えても，丁寧に問診をし，詳細に，素人にわかるようになぜ，この薬を今，使う必要があるか説明をしてくださる。同じ喉が痛い症状であっても，同じ薬ばかり処方されるということはない。専門性と患者をトータルで診ることに基づくきめ細かい判断と配慮を感じる。もしかしたら，専門医よりも薬についても，あらゆる分野の医学的知見についても日々，学ばれているのではないかと思う。総合診療医としての限界がある場合は，ご自分が直接知っている信頼関係がある病院へ繋いでくださる。そして，患者が何を聞いても自己防衛されないところが更に尊敬するところである。私は医師ではないが，主治医のような臨床家をめざしたいと思ってきた。

最近は，一昔前のアンチテーゼとして，エビデンスがあることが当然な時流である。エビデンスのあることをするのは専門家としてあたりまえのことである。しかし，臨床心理にとってのエビデンスとは何を指すのか人それぞれの立場があるだろう。私たちが日常的に慣れ親しんでいるロゴス的論理（＝因果律）だけで，臨床家としてクライエントを理解することができるのであろうか。心理支援の実用性，実効性を極端に追及すると，人間を実用性の基準で選別してしまう危険性につながらないかというのは心配のしすぎであろうか。最近は，クライエントも「使える心理師かどうか」で判断したり，「実習カウントにならないことはしません」という院生もいるようだ。確かに専門家として役に立たないというのはいただけないし，教育の適正化は必要である。しかし，メリットない無駄なことは切り捨てるという風潮についていけないのは古い人間になってきたからであろうか。

人のこころはそんなに合理的ではないところが臨床の難しさである。南方熊楠の縁起律による世界の理解の仕方は大事な示唆を与えてくれる。心理臨床家の基本は，技術や技法の前に「人と人との関係」があることが大前提であることに変わりはない。私たちは多様な防衛で身を守りながら生活している。誰でも傷つくことは避けたい。しかし，臨床家は傷つきと自分の防衛に気づき，それを乗り越え，絶えず，他者の目に己の臨床活動を晒し，自己理解の努力を続ける覚悟と実行が必要と自戒の意味も込めて，臨床家を目ざす若い人たちには伝えたいと思ってきた。

「あなたが臨床家を目指したいと思った原点は？」という問いを毎年，M1になった最初の授業で考えてもらっている。人それぞれの原点の違いがわかれば，主義主張で折り合いをつけることが難しい心理の世界も案外，歩み寄れるのではないかと希望をもっている。